

日幌 草太（ひほろ・そうた）

1、プロフィール

詩人。昭和 16 年頃から詩を作る。僅か 3 年余りの詩作であったが、「ともしび」、「芝生」、「草原」などの詩誌に作品を掲載した他、編集・印刷・製本を担当した。

<生没>

1923(大正 12)年 12 月 26 日～1945(昭和 20)年 5 月 29 日

<代表作>

「ともしび」(詩誌、昭和 16 年～18 年、叙情詩を発表)、「芝生」(方言詩誌、昭和 17 年、方言詩「挽歌」などを発表)、「草原」(詩誌、昭和 19 年、詩「雪の夜に」などを発表)。

<青森との関わり>

弘前市出身。小野印刷所の文選工をしながら、同所の詩人秋村静映の影響を受け詩作した。

2、作家解説

本名は佐藤喜代衛。弘前市立和徳尋常小学校から市立弘前高等小学校へ進学したが、昭和 11 年父の死去により同校を中退。林檎工場を経て、富田町小野印刷所の文選工となる。同所の詩人秋村静映の影響で詩を作り始める。16 年同人詩誌「ともしび」創刊。日幌草太のペンネームで叙情詩を発表、編集・印刷・製本を担当した。

17 年市立弘前青年学校が開校し、佐藤は本科第五学年に編入となる。同校助教諭に、詩人一戸謙三がいた。同年方言詩誌「芝生」(カガワラ)が再刊され、「挽歌」などの方言詩を発表する。この頃、同所女工皆川きよ子に思いをよせた他、同所長小野吾郎妻きよゑを「かあさん」と慕う。

18 年 9 月から 11 月にかけて、一戸謙三による「近代詩講座」(草原社研究会主催)を北島一夫らと熱心に受講する。12 月同人詩誌「草原」第一輯刊行に携わり、

詩「雪の夜に」を発表する。その一節、「(略)／北の国に生れながら／南の陽に息吹く草を想ふ私だつたのか／遠い流れの音が／それは私の心の内からとも知らず洩れてくる。」翌 19 年正月に、草原社は佐藤の送別会も兼ねて新年会を開いた。

同年 3 月、弘前東部第五十七部隊に入営。8 月には、フィリピン ルソン島ブラカン州、帝国陸軍第十四方面軍に配属となった。12 月にマッカーサー率いる米軍が上陸し、帝国軍との間に死闘が繰り広げられた。22 年 6 月に北柳町佐藤家に届いた「戦死公報」によれば、佐藤は 20 年 5 月 29 日同地で戦死したという。

通夜の席での心境を、北島は「啞蟬 —— 悼 日幌 草太」と題した一篇の詩に詠んだ。「君の戦死の知らせを受けてから／われはその面影を喪章の陰に鎮めてみた／愛惜とともにすると空しい嘆きを —— / (略) / 君を弔ふう蒸し暑い通夜の日だつた／ああ われはその時／その(蟬の)羽搏きに始めて風の心を感じ／どうも死んだ気がしねえ／と危く聲を支へ佛壇に飾られてある／君の在りし日の寫眞を眺めたのだつた」

3、資料紹介

○詩誌「草原」

雑誌

1943(昭和 18)年 12 月 17 日

230 mm × 163 mm

昭和 18 年、一戸謙三を講師とした「近代詩講座」の受講生の中から「草原社」結成の機運が高まった。一戸は「めいめいが一本の草みたいにずんずんのびて行ったらよい」と激励。日幌が編集を担当し、「雪の夜に」など 15 篇の詩が収録された。